

槐

かい

岡井省二創刊

平成19年8月号

平成十九年八月一日発行 第十七巻第八号
平成二年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第 九四号 毎月一冊 日発行



夏落葉

高橋将夫

にここにこと梅酒の瓶の底の梅
何よりも金魚が好きな金魚売り
あてにせず毒消売を待つてをり
涼しさや視線合はさぬ阿吽像

夏 落 葉 踏 む 桃 色 の 鳩 の 足

蓮 浮 葉 ほ ど に は 浮 い て を ら ざ り き

蟻 地 獄 か ら 見 ゆ る の は 空 ば か り

夏 の 霧 疑 心 暗 鬼 を 包 み た る

釣 人 も 蜘蛛 も 短 気 で あ る と い ふ

緑 陰 の 奥 が 心 の 置 き ど こ ろ

ゆ つ く り と か つ す み や か に 夏 落 葉

槐賞受賞作品二十句

竹中一花

鉄臭き街の朧夜なりしかな
春月や解かしてゐたる八丁味噌
蛇塚に吹き上げられし春の雪
花狂ひ三日三晩を花の中
ざらざらの櫻の幹のひこばへる
ほうたるに紛れてしまふ射手座かな
芍薬の夜を流れし匂ひかな
蠍座の写る真清水汲んでをり
鉾巡行終りしあとの深眠り
北斗出て音なく現れし墓

宵闇の白象の間に座りたる
天狼に晒す乳房の青き筋
月光やしんと腓のからみをり
越中の夜風さわさわ風の盆
雀啼く銀河の夜明けなりしかな
ふぐりなき身に照り出でし冬の月
冬銀河巨漢の腕に嬰眠る
山眠る雄獅子雌獅子の納め蔵
凍て月の光斜めに越の海
春めくやよもつひらさか薄曇

槐安集

水野恒彦

雲は立ち樹々ひしひしと五月憂し
牡丹に螺旋階段見えてをり
緑蔭に馬の骨格みなぎりし
茅花流し少年川を涉り来る
ニセアカシア男時ほのかに匂ひけり

延広禎一

阿古屋貝に核入れてをる子供の日
天気図は夏の兆しよ卵溶く
岩窟に夏の風あり波羅蜜多
青葉木菟寺に温泉湧いてをる
滴りを掛け合つてゐる夫婦かな



加藤みき

赤土に独活の香りの漂へり
薄縁^{うすべり}に届いてゐたる新樹光
棕櫚の花肺賄養ひゐたりけり
雨雲や麻の葉の形鮮々し
青水無月風の帽子を追ひかけて

石脇みはる

しんとある麓の桐の高さかな
血圧計の贈られて来し土用波
自然薯に花つけてをる鞍馬かな
蛇の野のしげり恐れてゐたりけり
最澄の山に来てをる立夏かな

中島陽華

若沖の白浮き出でし夏の昼
仙人の芹摘む匂ひしてゐたり
子がすすをつけて出てくる五月かな
波羅密や薰風吸うてゐたりける
そそけたる糸ほどけたり夏涼し

竹内悦子

よく笑ふ嬰のてのひらさくらんぼ
万緑や夜もみどりを滴らす
入口の手摺のいろの青蛙
生かされてま昼の檻の青葉木菟
仏頭に雨の雫や槐咲く

栗栖恵通子

シャーマンの口の中なる五月闇
青嵐の山に向きたる校旗台
五月雨や胸に穴ある藁人形
燃燈佛の生れけるあたり蝮穴
引き金に冷夏の指のありにける

大島翠木

墨と硯の肌を思ふ花槐
あかつきにピアニシモなる竹落葉
まだ色の浅き紫陽花弁財天
落し文山のかなしみかも知れず
さそはれしこと腑に落ちて螢見に

雨村敏子

心に風入れ八十八夜かな
柿若葉この世のものの美しき
目が合うて虎魚の前につこりす
雲丹割るや銀色の雨降りにける
しあはせはまあるいかたち葱坊主

小形さとる

こめかみがそろそろ犬のふぐりかな
鯰池にて瓢箪がみつからず
鮎かと思ふたに琵琶湖大鯰
大渦のまん中で海を探してゐる
鳥雲にしのはび笑ひのふくらはぎ

本多俊子

熊谷草祈るこころのかたちかな
大空の深海汲むや御忌小袖
春夕日どろどろと浮き沈みゆく
椎落葉散華散華となりにつけり
黒南風や辿りつかざる百八つ

天野きく江

この時を過去とよぶ夜も蟬生まる
風となるはず玲瓏の杜鵑
命日は細やかに飛ぶ蜚かな
万緑やシフォンケーキのできあがる
夕焼や二タ手に別れ行く少年

槐市集

宇田喜美栄

知らぬ鄙歩いてみたし桃の花
切株に座つてをるや芽吹山
粉殻を朝な朝なに独活二尺
小諸いま若葉若葉の日なりけり
薫風や吾をすぎゆくものあまた

奥村邦子

雷鳴や鳳凰堂のぐるりより
日の匂ひ深くなりゆく蜘蛛の糸
螢籠 女人高野の闇深し
椎の花熱気を帯びる虚空かな
鳳凰のひかりの中を花は葉に



加藤富美子

川波の昏みてゐたる花うつぎ
喉元につまづく声や栗の花
春の杖寸又峽まで試歩のぼす
日に倦みて均整くずす蝶の昼
臍を水の流れに谷うつぎ

金澤明子

鯨鉾の修理の足場青あらし
夏はじめアクロバットの飛行雲
花婿の蟻追ひし頃の笑ひ声
夫々に船留の川菖蒲園
母の日のFAX音となりにつけり

槐集

高橋将夫選

観音の頭の仏桐の花 枚方 中野京子

体内の本流支流風薫る

白鷺の一点集中昼しじま

水馬かるがる過ぎる日々なりき

スパイスのまじる言の葉柿若葉

重たさを風に投げ出す牡丹かな 岡崎 近藤喜子

葉桜や憑きもの堕ちし人ばかり

松蟬や穴ひらかんとオゾン層

山彦の若返りたる新樹かな

青葉木菟こゑ天心に届くなり

尺蠖の次の一点定まらず 高松 十川たかし

百歩ほどジャスミンの風つき来る

好きなものの白詰草の水辺だけ

焼酎のオンザロックに風の音

公達の首搔かれたる瓜畑

鏡には映らぬ春のありにけり 枚方 近藤紀子

花筵のお暗きところ誰か居る

天降りたまふ山の麓に萵苣の花

カモミールの花挿してをり子の来る日

振姫のもたれし岩や苔の花 振姫 皇太子の御生母

青蜥蜴白昼の闇裂きにけり 安城 近藤公子

致死量の百合の香りの中にかな

蟬穴を出で空の色知りたるよ

無風なる大きな夏の中にかな

みぎまんじひだりまんじに優曇華よ

花屑や神も分婉したまへり 奈良 瀬川公馨

春月のこぼれてゐたりジエノサイド

花茨の発光体の木下かな

オペラピンクの足元からすの豌豆

萍の無心に素踊りしてゐたり

銀河往来

高橋将夫

◇「槐集」観照

尺蠖の次の一点定まらず 十川たかし
尺蠖が先端部分の着地に迷っている様子がいかにもユーモラス。どうやら尺蠖も考えながら尺を取るらしい。もとより、作者の心は定まっているのだろうか。

鏡には映らぬ春のありにけり 近藤 紀子
鏡に物が映る句は五万とあるが、映らぬ句は珍しい。しかも、それが春だというから、なんとも妖艶。映っていない春の実態を詮索せずにおれない一句。

致死量の百合の香りの中にな 近藤 公子
むせ返るほどの百合の香りの中に居る様子が鮮やかに見えてくる。そういえば、死者は百合の香に包まれて静かに眠る。

春月のこぼれてゐたりジェノサイド 瀬川 公馨
ジェノサイドは集団殺戮。悲惨な歴史は多数あるが、私の場合は、はるか遠くのアラブの空の春月が脳裡に浮かんだ。寒月だったら、きつといたたまれなくなるだろう。

沈黙の火の山茅花流しかな 岩月優美子
いつまた沈黙を破るかもしれない火山の麓。それだけに、茅花流しがひとときわやわらかに感じられる。

時の日の時計昭和の音に鳴る 久保東海司
このごろの時計は針が無かったり、振子が回転したりする。柱時計の振子の音が時を刻み、ボーンと時を告げる音を思い出すと昭和も遠くなったとしみじみ思う。

北山の丸太しみじみ夏はじめ 谷村 幸子
杉の木が立ち並び、杉丸太が積まれた北山の初夏。杉が匂ってくるようなすがすがしさを感じる。まさに、しみじみの一語に尽きよう。

刺青に朱を入れたるは業平忌 西村 純太
このごろは素人さんでも刺青を入れるらしいが、いずれにしても普通ではない。いろいろ想像はふくらむが、業平忌だけに、その方向はおのずと決まろう。

春雷や見守つてをる翁面 中田 禎子
春雷の中で翁面が我をじっと見守ってくれている。どんな事があっても、省二先生が守ってくれているようだ。

白牡丹崩れ霊気となりにけり 奥村 邦子
大輪の白牡丹が崩れるように散った。その瞬間、あたりに霊気が漂うのを感じたという。白牡丹が眼前に迫ってくるようだ。霊気はやがて鬼神の姿なる……とまでは言っていないが。

葛城の山の羞恥や山躑躅 富松 寛子
山頂から見ると一目百万本の躑躅。山がまるで恥らうように赤く染まる。山は笑ったり、眠ったりするが、恥じらいもあるようだ。修験道の山だけにまことにユーモラス。